

編集後記

<編集顧問>

鈴木 秋悦
武田 佳彦
青野 敏博

<編集委員>

岡井 崇
神崎 秀陽
倉智 博久

昨年の総選挙で医師の60%が民主党に投票したとの情報が伝わっています。これは自民党を支持してきた日本医師会の求心力の低下を如実に表すとともに、民主党のマニフェストに記された“コンクリートから人間へ”のフレーズに医師が心惹かれた数字でもあると思っています。対GDP比国民医療費がOECD加盟国の下から三番目という不名誉からの脱出、すなわち人の命を軽視する国策の転換に期待が寄せられたのです。

ところが、いざ予算編成の段になると、財政赤字の巨大さに立ち竦み、来年度税収の大幅な落ち込み予想に足を掴まれて、結局は歩を前に進めることができずにいるようです。年越しの前に行われた“事業仕分け”では、医療危機打開に向け最優先の施策と位置付けられたはずの救急・周産期医療関連の補助金が半減されました。民主党自身がマニフェスト実現の難しさに頭を痛めていることでしょう。

ようやく産婦人科入局者数の減少に歯止めが掛かった、とは言っても、今後の情勢は予断を許しません。何よりも、現下の厳しい状況で入局してきた若手医師の勤務環境の目に見える改善を実現させなければ、入局者増を軌道に乗せることはできません。

学会にとっては政権政党はどちらでもいいのです。医療崩壊をくい止める有益な政策を打ち出し実行してくれさえすれば……。引き続き、力を結集して政府と行政機関に働きかけようではありませんか。本年も宜しくお願い致します。

(岡井 崇)